View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Tsukuba Repository

# 集団的自尊心と社会的比較志向性がネガティブな結果フィードバック後の自尊心に及ぼす影響の検討



| | |
|---|---|
| 著者 | 重村 菜月, 外山 美樹 |
| 雑誌名 | 筑波大学心理学研究 |
| 巻 | 58 |
| ページ | 13-19 |
| 発行年 | 2020-02-28 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00159708 |

*Tsukuba Psychological Research*
2020, **58**, 13-19



# 集団的自尊心と社会的比較志向性がネガティブな結果フィードバック後の自尊心に及ぼす影響の検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科　重村　菜月

筑波大学人間系　外山　美樹

Collective self-esteem and social comparative orientation effects on self-esteem after negative outcome feedback

Natsuki Shigemura (*Graduate School of comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to identify the characteristics of people who do not reduce their self-esteem, even when receiving negative feedback about their inferior performance within a group. Study 1 with 182 college students focuses on collective self-esteem. Its results indicate that state self-esteem declines when individuals are inferior within a group regardless of the level of collective self-esteem. Study 2 with 173 focuses on social comparative orientation. Similarly, its results indicate that state self-esteem declines when individuals are inferior within a group regardless of the level of social comparative orientation. However, when comparing the lowly ranked members within a group, individuals with low orientation for social comparisons exhibited higher state self-esteem than those with high orientation for social comparisons. These findings suggest that not comparing oneself with others can prevent reductions in self-esteem when individuals are lowly ranked within high-level groups.

**Key words:** collective self-esteem, social comparative orientation, state self-esteem

人のパフォーマンスに影響を及ぼすものは，本人の能力だけではない。周りの環境，すなわち，その人の属する集団のレベルも同様に影響する。例えば，学校成績が同程度の生徒がいたとする。そのうち一方の生徒が，レベル別クラスの上のクラス，もう一方の生徒が，下のクラスに所属すると，その後の生徒の成績は異なることが予想される。また，学業場面以外でも同様のことがいえる。例えば，習い事などでも，通う教室のレベルの選択によって，本人が周りから受ける影響に大きな差が見られると考えられる。通常，人は，レベルの高い集団に所属することを望む場合が多い。しかし，レベルの高い集団に所属すれば，必然的に自分よりレベルの高い人との比較にさらされることになる。

周りの他者との比較は社会的比較といい，自分よりレベルの高い者との比較を上方比較，自分よりレベルの低い者との比較を下方比較という（Festinger, 1954）。先行研究で，上方比較のネガティブな影響に関して検討されている。例えば，Dickhäuser & Galfe（2004）は，試験成績の良い生徒との上方比較は，生徒の学業的自己概念にネガティブな影響をもたらし，試験で成績が悪い生徒との下方比較は，ポジティブな影響をもたらすことを示した。Myungsuh &

連絡先：✉mtoyama@human.tsukuba.ac.jp（外山美樹）

Yoon（2019）は，上方比較は，悪性妬み感情につながり，最終的には孤独感につながることを明らかにした。悪性妬みとは，強いいらつきを含み，優れた他者を傷付けるような行動につながる妬みのことで，良性妬みとは，自分の行動の改善につながる妬みのことである（中井・沼崎，2018）。また，Lewis（2019）も上方比較は悪性妬み感情と結びつき，結果として自尊心の低下につながることを明らかにしている。日本の研究でも，自分より優れた他者との比較により状態的な自尊心が低下することが示されている（礒部・浦，2002）。

しかし，自分より優れた他者との比較で必ずしも自尊心が低下するわけではない（礒部・浦，2002）。Tesser（1988）は，上方比較には，優れた他者と自分を比較しネガティブな結果へとつながる比較過程と，優れた他者を自己を表象するものとして捉えポジティブな結果へとつながる反映過程があると明らかにした。ここから，上方比較により，どちらの影響を受けるかに関わる調整要因の存在が考えられる。そこで，本研究では，レベルの高い集団で受ける否定的な影響を調整する２つの要因に着目する。

まず１つ目は，「集団的自尊心（collective self-esteem）」である。集団的自尊心とは，自分の所属集団に対し誇りを持つこと（Luhtanen & Crocker, 1992）で，社会的アイデンティティの強さとその望ましさ，内集団びいきを示す傾向の強さと関連している（渡辺，1994）。集団的自尊心が高いことのポジティブな影響については，先行研究で多く示されてきた。例えば，Gardner, Gabriel, & Hochschild（2002）は，集団的自尊心が高く，上方比較の相手が自己の一部として解釈されるとき，相手を祝福するようになることを示した。また，Yu, Zhou, Fan, Yu, & Peng（2016）は，集団的自尊心の向上が，自尊心の向上に結び付き，幸福感を高めることを明らかにした。さらに，McFarland & Buehler（1995）は，集団的自尊心の高い人は，集団内で自分が劣っていて周りが優れているという状況に置かれてもネガティブな感情を抱かず，自身の能力に対する評価も低下させないことを示した。このため，上述した，集団的自尊心が高い人は，集団の成員が自分より良い結果を収めたとしても自分に対して好意的な感情を抱き，上方比較のネガティブな影響を受けにくくなると考えられる。

２つ目は，「社会的比較志向性（social comparison orientation）」である。社会的比較志向性とは，社会的比較を行う程度のことであり（Gibbons & Buunk, 1999），「自己への意識の活性」，「他者への関心の高さ」，「ネガティブな感情の高さや自己評価の低さ」が社会的比較志向性の高さに関連する（Buunk & Gibbons, 2006）。そもそも，上方比較によるネガティブな影響は，周囲の成績と自らの成績を比較することから生じるものであり，普段から周りとの比較を行わない人，すなわち，社会的比較志向性の低い人は，上方比較のネガティブな影響を受けにくいのではないかと考えられる。Ludtke, Koller, Marsh, & Trautwein（2005）は，中学生の担任が成績のフィードバックを個人内の継時的比較に基づいて行うと，生徒の学業に対する自信が低下しない一方で，他者との比較によりフィードバックを行うと，学業に対する自信が低下することを明らかにした。さらに，社会的比較志向性の高い人は，上方比較によってネガティブな感情を経験することが明らかになっている（Bunnk, Zurriaga, Peiro, Nauta, & Gosalvez, 2005）。以上のことから社会的比較志向性の低い人は，上方比較によるネガティブな影響を受けにくく，レベルの高い集団内での自尊心の低下を防げるのではないかと考えられる。

よって，本研究では，「集団的自尊心」（研究１）と「社会的比較志向性」（研究２）に着目し，これらが，自分が集団内で劣っているという状況に置かれた際の自尊心を調整するのかどうかを検討することを目的とする。本研究では，次のような方法で調査を行う。まず，調査対象者に対し，場面想定法を用い，学力テストを受けその結果を見た場面を想像してもらう。その後，テストの点数自体は全員同じであるものの，半分の人には所属集団の平均点を自分が上回っていたという肯定的フィードバック，もう半分には所属集団の平均点を自分が下回っていたという否定的フィードバックを与える。最後に，状態的自尊心（フィードバック直後の自尊心）を測定する。そして，集団的自尊心や社会的比較志向性の程度と，フィードバックの種類（肯定，否定）が，状態的自尊心にどのように影響するのかを検討する。

本研究の仮説は，以下の通りとした。まず，研究１において，否定的なフィードバックを受けた条件における集団的自尊心の高い人は，集団的自尊心の低い人と比べて，状態的自尊心が低下しない，すなわち，上方比較のネガティブな影響が緩和されると考えた。なお，肯定的フィードバック条件に関しては，McFarland & Buehler（1995, study2）の実験で，集団的自尊心の高低に有意な差はないという結果が報告されていることから，本研究でも同様の結果になると予測した。

研究２では，否定的フィードバック条件においては，周囲との比較をあまり行わない社会的比較志向性の低い人は，高い人に比べて，状態的自尊心が低

下しないという仮説を立てた。一方，肯定的フィードバック条件においては，他者との比較を頻繁に行う社会的比較志向性の高い人は，周りと比べて自分ができていたという事実を誇りに思うと考えられるため，社会的比較志向性が低い人に比べて，状態的自尊心が高くなると予測した。

## 研 究 1

### 目的

集団的自尊心が高いと，自分が集団内で劣っているというネガティブなフィードバックを受けた場合の状態的自尊心が低下しにくくなるかどうかを検討する。

### 方法

**調査対象者と調査時期**　埼玉県内の大学の大学生に対して，2018年６月中旬の講義時間中に質問紙調査を行った。調査対象者全員に対し，回答は任意であること，データは統計的に処理され個人が特定されることはないこと，回答の有無が講義の成績に影響しないことを伝えた。その結果，185名から回答を得た（男性56名，女性129名）。調査対象者の平均年齢は19.82歳（標準偏差1.16）であった。

**質問紙**　（１）集団的自尊心；渡辺（1994）の日本語版集団自尊心尺度の下位尺度である「同一化」と「成員性」を使用した。項目内容の「自分が所属している様々な社会集団」，「自分が分類されている様々な社会集団」といったワーディングを，本研究では，実際に調査を行った大学名へ変更して使用した。同一化の項目は，「自分が○○大学の一員であるということは，わたしの自己イメージを形成する重要な要素となっている」など４項目，成員性の項目は「わたしは，○○大学の価値ある一員だ」など４項目，計８項目であった。それぞれの項目について，「全くそう思わない（１点）」から，「非常にそう思う（７点）」まで，７件法で回答を求めた。

（２）状態的自尊心；阿部・今野（2007）の日本語版状態自尊心尺度を使用した。「いま，自分は人並みに価値のある人間であると感じられる」などの９項目に対して，「全くそう思わない（１点）」から，「とてもそう思う（５点）」まで，５件法で回答を求めた。

**手続き**　まず，（１）の集団的自尊心を測定する質問項目への回答を求めた。その後，１分間，調査対象者全員に，大学生を対象にした学力テストを受け，その結果を見た場面を想像してもらった。調査対象者を，肯定的フィードバック条件（$n=96$）と否定的フィードバック条件（$n=89$）にランダムに割り当てた。全員が学力テストで100点中60点を取ったということになっているが，肯定的なフィードバック条件では「あなたの点数60点，○○大生の平均点45点，○○大生の最高点70点，○○大生の最低点20点」と記載されていた。一方で，否定的なフィードバック条件では「あなたの点数60点，○○大生の平均点75点，○○大生の最高点100点，○○大生の最低点50点」と記載されていた。なお，これらの点数が記載されているページには，自分の相対的位置づけを視覚的に把握できるように，同じテストを受けた大学生の得点の分布表と，その分布表内での自分の位置を記載した。 最後に（２）の状態的自尊心を測定する質問項目への回答を求めた。

### 結果

まず，集団的自尊心得点のCronbachのα係数を算出したところ，.81であった。そこで，８項目の平均値（$SD$）を求めたところ，3.72（0.97）であった。その後，集団的自尊心得点の平均値に基づき，集団的自尊心高群（$n=81$，$M=4.59$，$SD=0.52$）と集団的自尊心低群（$n=104$，$M=3.04$，$SD=0.63$）を設定した。なお，集団的自尊心高群と低群の間に，集団的自尊心得点に有意差がみられるかどうか$t$検定を行ったところ，有意な差がみられた（$t(184)=17.83$，$p<.05$，$d=2.67$）。

次に，フィードバックの種類（肯定的，否定的）と集団的自尊心（高，低）を独立変数とし，状態的自尊心得点（$M=3.27$，$SD=0.98$，$\alpha=.95$）を従属変数とする２要因分散分析を行った（Figure 1）。その結果，フィードバックの種類の主効果のみが有意であり（$F(1,181)=138.19$，$p<.001$，$\eta_p^2=0.43$），肯定的フィードバック条件（$M=4.00$，$SD=0.50$）のほうが，否定的フィードバック条件（$M=2.61$，$SD=0.92$）よりも状態的自尊心が高かった。一方，

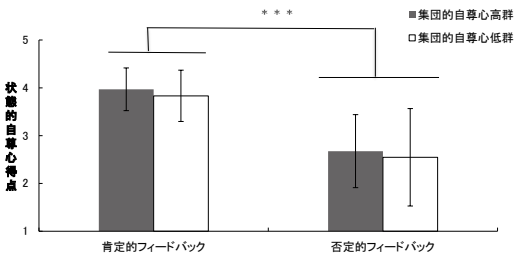


Figure 1. フィードバックの種類×集団的自尊心の状態的自尊心得点の比較（研究１）。
注）エラーバーは標準偏差を表す。
***$p<.001$

集団的自尊心の主効果（$F(1,181)=138.19$, *n.s.*, $\eta_p^2<.001$），ならびに，交互作用（$F(1,181)=138.19$, *n.s.*, $\eta_p^2<.001$）は有意ではなかった。

### 考察

研究1の結果より，フィードバックの種類の主効果のみが見られ，否定的フィードバックを受けた人の方が肯定的なフィードバックを受けた人よりも，状態的自尊心が低かった。この結果は，礒部・浦（2002）の上方比較により，状態的自尊心が低下するという結果と一致している。

一方で，集団的自尊心とフィードバックの種類の交互作用は有意にならなかった。よって，仮説は支持されなかった。このような結果になった原因として考えられるのは，集団的自尊心の影響よりも，上方比較のネガティブな影響のほうが大きかったということである。Marsh, Kong, & Hau（2000）は，学業水準の高い集団に所属した際，優れた集団と自分を同一視するポジティブな栄光浴効果と，優れた集団と自分を比較するネガティブな比較効果のどちらが大きいかを直接比較した。結果として，比較効果の方が大きいことが分かっている。本研究でもレベルの高い集団成員への結びつきよりも，レベルの高い集団成員とのネガティブな比較の影響の方が大きかったと考えられる。そのため，集団的自尊心は調整変数とならず，フィードバックの主効果のみが見られたと考えられる。

なお，肯定的フィードバック条件においては，集団的自尊心の高低で状態的自尊心に差は見られず，仮説が支持された。この結果は，McFarland & Buehler（1995, study2）と同じ結果である。肯定的フィードバックの中には，自らが集団内で優れているというポジティブな内容が含まれているが，逆に言えば，自らの所属集団が劣っているというネガティブな情報も含まれている。そのため，所属集団を誇りに思う集団的自尊心の高い人にとっては自らの所属集団が劣っているという事実がネガティブに作用する可能性も考えられた。McFarland & Buehler（1995）は，集団的自尊心の高い人は，自分がレベルの低い集団で優れているときには自分に焦点を当てることを明らかにしている。一方，自分がレベルの高い集団で劣っているときには，集団に焦点を当てることを明らかにしている。そのため，本研究でも，集団的自尊心の高い者は，レベルの低い集団内で自分が優れているというフィードバックを受けた際，自分に焦点を当て，自尊心を向上させていたと考えられる。

## 研究2

### 目的

社会的比較志向性が低いと，自分が集団内で劣っているというネガティブなフィードバックを受けた場合の状態的自尊心が低下しにくくなるかどうかを検討する。

### 方法

**調査対象者と調査時期**　埼玉県内の大学の大学生に対して，2018年10月中旬の講義時間中に質問紙調査を行った。調査対象者全員に対し，回答は任意であること，データは統計的に処理され個人が特定されることはないこと，回答の有無が成績に影響しないことを伝えた。その結果，173名から回答を得た（男性32名，女性141名）。調査対象者の平均年齢は19.32歳（標準偏差1.01）であった。なお，この調査対象者は研究1とは異なる対象者である。

**質問紙**　（1）社会的比較志向性；外山（2002）の社会的比較志向性尺度を使用した。5件法，7項目であり，「自分の親しい人の状況と他人の状況をよく比べる」，「他人のやり方と比べて自分のやり方はどうであるか いつも気にしている」などの7項目それぞれに対して，「全くそう思わない（1点）」から，「とてもそう思う（5点）」まで，5件法で回答を求めた。

（2）状態的自尊心；研究1と同様の尺度を用いた。

**手続き**　まず，調査参加者全員に，（1）の社会的比較志向性を測定する質問項目への回答を求めた。その後の手続きは，研究1と同様に行った。

### 結果

まず，社会的比較志向性のCronbachのα係数を算出したところ，.79であった。その後，社会的比較志向性得点の平均値（$M=3.49$, $SD=0.71$）に基づき，社会的比較志向性高群（$n=92$, $M=4.03$, $SD=0.38$）と社会的比較志向性低群（$n=81$, $M=2.88$, $SD=0.45$）を設定した。なお，社会的比較志向性高群と低群の間に，社会的比較志向性得点に有意差があるかどうか，$t$検定を行ったところ，有意差がみられた（$t(171)=18.17$, $p<.001$, $d=2.73$）。

次に，フィードバックの種類（肯定的，否定的）と社会的比較志向性（高，低）を独立変数，状態的自尊心得点（$M=3.09$, $SD=0.95$, $\alpha=.93$）を従属変数とする2要因分散分析を行った（Figure 2）。その結果，フィードバックの種類の主効果（$F(1,169)=163.49$, $p<.001$, $\eta_p^2=0.43$），社会的比較志向性

の主効果（$F(1,169)=15.54$，$p<.001$，$\eta_p^2=0.04$）がともに有意であった。さらに，フィードバックの種類×社会的比較志向性の交互作用も有意であった（$F(1,169)=23.92$，$p<.001$，$\eta_p^2=0.14$）。

交互作用が有意であったため，単純主効果の検定を行ったところ，社会的比較志向性高群においても（$F(1,169)=170.23$，$p<.001$，$\eta_p^2=2.26$），低群においても（$F(1,169)=28.80$，$p<.001$，$\eta_p^2=0.96$），肯定的フィードバックを受けた人より否定的フィードバックを受けた人の方が有意に状態的自尊心得点が低かった。また，否定的フィードバック条件において，社会的比較志向性の単純主効果が有意であり（$F(1,169)=46.07$，$p<.001$，$\eta_p^2=1.07$），社会的比較志向性の低い人は有意に状態的自尊心得点が高かった。

## 考察

否定的フィードバック条件において，社会的比較志向性低群が高群より，状態的自尊心が高いという結果となり，仮説が支持された。社会的比較志向性得点と自尊感情得点の間には負の相関があることが明らかになっている（外山，2002）。すなわち，社会的比較志向性が低ければ，自尊感情が高くなるということである。よって，もし自らが集団内で劣っているという状況に置かれるのであれば，周囲との比較を行わないことによって，自尊心の低下を防ぐことができると言えるだろう。

一方，肯定的フィードバック条件においては，社会的比較志向性低群と高群の間に，状態的自尊心の有意差は見られず，仮説は支持されなかった。先行研究では，他の人よりも優れていると，自分自身についてよりよく感じるという結果が，数多く示されている（Taylor & Lobel, 1989; Wheeler & Miyake, 1992; Wills, 1981）。そのため，社会的比較志向性の低さよりも，自分が集団内で優れているという結果の影響が大きく作用したと考えられる。よって，他者との比較をよくする，しない，にかかわらず，集団の中で自分が優れているという事実は，自尊心の向上につながると言えるだろう。

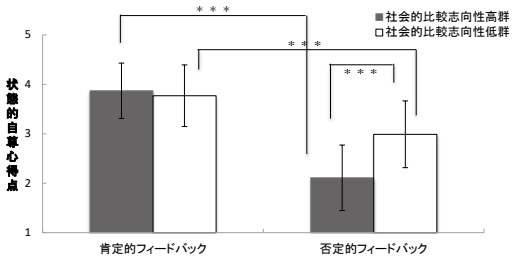


Figure 2. フィードバックの種類×社会的比較志向性の状態的自尊心得点の比較（研究２）。
注）エラーバーは標準偏差を表す。
***$p<.001$

## 全体考察

研究１では，「集団的自尊心」という概念に着目し，調査を行った。この研究では，集団的自尊心の高い人は，レベルの高い集団内で自らが劣っている状況に置かれても自尊心が低下しないのではないかという仮説を立てた。しかし，集団的自尊心の高さにかかわらず，自らが集団内で劣っている状況に置かれれば自尊心が低下するということが明らかになり，集団的自尊心の高さが上方比較から受ける影響を調整するとは言えなかった。研究２では，「社会的比較志向性」という概念に着目し，調査を行った。その結果，社会比較志向性の高い群，低い群，両群において，優れた集団内で自分が劣っている状況では，自尊心が低くなった。しかし，その優れた集団内で劣っているという状況内で比較した際，社会的比較志向性の低い人は，高い人に比べて自尊心が低下しにくいということが明らかになった。この結果から，社会的比較志向性の高低にかかわらず，レベルの高い集団に入れば自尊心が低下することは避けられないが，もしそのような場合，他者との比較をあまり行わないことで自尊心の低下を緩和できると考えられる。

本研究の結果を踏まえて，レベルの高い集団内でネガティブな影響を受けにくくするための対策について述べるとすれば，まずは自らが周囲との比較をあまり行わないように心がけることである。または，成績のフィードバック時に他者との比較をしにくいような環境を整えることも有効であると考えられる。例えば，成績のフィードバック時に，Ludtke et al.（2005）の調査でも挙げられていたような，他者との比較ではなく，個人内比較を用いることは有効であると考えられる。もちろん，研究１でも研究２でも示されていたように，集団内で自分が優れているという状況に置かれれば，自尊心の低下を心配する必要はない。しかし，時に，自分よりも優れた人の多い集団に所属しなければならない時もあるだろう。もし，そのような集団に所属することになった場合，社会的な比較をあまり行わないようにすることで，上方比較のネガティブな影響を受けにくくすることができると考えられる。

最後に，本研究の限界点を述べる。まず，調査実施時に実際のフィードバック場面ではなく，仮想的

なフィードバック場面を用いたことである。今後は，実際場面においての集団内での自分の位置づけや，その後の影響について調査をする必要があるだろう。また，今回は，学業場面を用いて調査を行ったが，学業という領域が結果に影響した可能性が考えられる。伊藤（1999）は，西欧文化圏の人は，知的能力の領域において，自分を平均以上だと評価する傾向があること（平均以上効果）を明らかにしているが，日本人に関しては明らかになっていない。この平均以上効果の有無が自尊心に影響するとも考えられる。本研究では，先行研究の多くで学業場面が用いられていたため，学業場面を採用した。今後は対象とする領域についても検討を行う必要がある。最後に，本研究では，従属変数を状態的自尊心として検討を行ったが，自尊心の変化がその後どのような影響を及ぼすかについては調査をしていない。Marsh（1991）は，集団内で下位に位置づけられた後，自尊心の低下以外にも，学習意欲の低下や，成績そのものの低下につながることも明らかにしている。しかし，これにも個人差があると考えられる。例えば，集団内で下位に位置づけられた場合，危機感を覚え学習意欲を高める人，あるいは，自分の力ではどうにもならないと無力感を覚え学習意欲を低下させる人，両方が考えられる。自尊心の低下や上昇が，その後，パフォーマンス自体にどのような影響を及ぼすのか，この点についてもさらなる検討が必要である。

## 引用文献


阿部美帆・今野裕之（2007）．状態的自尊感情尺度の開発　パーソナリティ研究，*16*，36-46.

Buunk, A. P., & Gibbons, F. X. (2006). Social comparison orientation: a new perspective on those who do and those who don't compare with others. In S. Guimond (Ed.), *Social comparison and social psychology: Understanding cognition, intergroup relations, and culture*. New York: Cambridge University Press, 15-32.

Buunk, B. P., Zurriaga, R., Peiro, J. M., Nauta, A., & Gosalvez, I. (2005). Social comparisons at work as related to a cooperative social climate and to individual differences in social comparison orientation. *Applied Psychology: An International Review*, *54,* 61-80.

Dickhäuser, O., & Galfe, E. (2004). Besser als, schlechter als: Leistungsbezogene Vergleichsprozesse in der Grundschule [Better, worse: Achievement-related comparison processes in elementary school]. *Zeitschrift für Entwicklungspsychologie und Pädagogische Psychologie, 36*, 1-9.

Festinger, L. (1954). A theory of social comparison process. *Human Relations, 7,* 117-140.

Gardner, W. L., Gabriel, S., & Hochschild, L. (2002). When you and I are "we," you are not threatening: The role of self-expansion in social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 239-251.

Gibbons, F. X., & Buunk, B. P. (1999). Individual differences in social comparison: Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology, 76,* 129-142.

礒部智加衣・浦　光博（2002）．内集団成員との上方比較後の感情・状態自尊心に，集団間上方比較と特性自尊心が及ぼす影響　実験社会心理学研究，*41*，98-110.

伊藤忠弘（1999）．社会的比較における自己高揚傾向――平均以上効果の検討――　心理学研究，*70*，367-374.

Lewis, N. (2019). Experiences of upward social comparison in entertainment contexts: Emotions, state self-esteem, and enjoyment. *The Social Science Journal, 16,* 12-24.

Ludtke, O., Koller, O., Marsh, H. W., & Trautwein, U. (2005). Teacher frame of reference and big-fish-little-pond effect. *Contemporary Educational Psychology*, *30*, 263-285.

Luhtanen, R., & Crocker, J. (1992). A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *18*, 302-318.

Marsh, H. W. (1991). The failure of high-ability high schools to deliver academic benefits: The importance of academic self-concept and educational aspirations. *American Educational Research Journal, 28,* 445-480.

Marsh, H. W., Kong, C. K., & Hau, K. T. (2000). Longitudinal multilevel models of the big-fish-little-pond effect on academic self-concept : Counterbalancing contrast and reflected-glory effects in Hong Kong schools. *Journal of Personality and Social Psychology, 78,* 337-349.

McFarland, C., & Buehler, R. (1995). Collective self-esteem as a moderator of the frog-pond effect in reactions to performance feedback. *Journal of*

*Personality and Social Psychology*, *68*, 1055-1070.

Myungsuh, L., & Yoon, Y. (2019). Upward social comparison and Facebook users' grandiosity. *Online Information Review, 43,* 635-652.

中井彩香・沼崎　誠（2018）．妬みのサブタイム理論とその測定法の検討――日本においても悪性妬みと良性妬みは存在するか？――　対人社会心理学研究，*18*，77-84.

Taylor, S. E., & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review, 96*, 569-575.

Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Adovances in Experimental Social Psycholigy*, *21*, 181-227.

外山美樹（2002）．社会的比較志向性と心理的特性との関連――社会的比較志向性尺度を作成して――　筑波大学心理学研究，*24*，237-244.

渡辺　聡（1994）．日本語版集団自尊心尺度構成の試み　社会心理学研究，*10*，104-113.

Wheeler, L., & Miyake, K. (1992). Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, *62*, 760-773.

Wills, T. A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin, 90*, 245-271.

Yu, X., Zhou, Z., Fan, G., Yu, Y., & Peng, J. (2016). Collective and Individual Self-Esteem Mediate the Effect of Self-Construrals on Subjective Well-Being of Undergraduate Students in China. *Applied Research Quality Life, 11,* 209-219.

（受稿９月30日：受理10月26日）